



会報

札幌くらぶ

2019年 6月 第86号

編集・発行／札幌くらぶ 〒064-0931 札幌市中央区中島公園 1-15 札幌事務局気付
ホームページ <http://sakyoclub.net/sakyoclub/>

第25回札幌くらぶサロン

札幌文化芸術交流センター（SCARTS）にて スペシャルバージョン

5月19日(日)の「札幌くらぶサロン」は初めて札幌文化芸術交流センターSCARTSで開催され、いつもより少しスペシャルな内容でした。
第一部では、大平まゆみさん



(札幌コンサートマスター)、梶井祥子さん(V・net顧問)、上田文雄さん(札幌くらぶ会長)、コーディネーターに八木幸三さん(札幌くらぶ顧問)を加えてのミュージックトークセッション。『まち・生活・音楽を語る』をテーマにお話をいただきました。

梶井さんがお話された「いま人と人がつながるのは、文化・芸術なんです」という言葉が印象的でした。大平さんがお話されていた地下鉄駅でのコンサートは私も何度か聴きに行きました。もちろん大平さんの演奏を目当てに聴きにいられている方も多いいと思いますが、普段クラシック音楽をあまり聴かない方でもいつもの帰り道で突然美しい音楽に出会えたら、札幌はいい街だなと感じる瞬間になると思います。また上田さんがお話をされていた「ファーストコンサート」、札幌に住むすべての小学生がギターで音楽を聴けるということを知りました。小さなときに自分の街の（しかも世界最高峰の！）コンサートホールで本物の音楽を聴ける

大平まゆみトリオ
デイベルティメント



という貴重な体験、なんて素敵なことだろうと思いました。札幌は季節を通して豊かな自然の変化があり、それと共に音楽を楽しめる街だと思えます。そこにギターがあり、hitaruが出来、これから色々な音楽活動がより盛んになることを思うとわくわくした気持ちになりました。
第二部は豪華なミニコンサート！大平まゆみさん(三)、鈴木勇人さん(三)、小野木遼さん(三)のトリオでした。モーツァルト作曲「デイベルティメントK563」は6楽章で構成され

45分にも及ぶ大曲です。この曲は色々なところでメロディの呼応がたくさんあり、とても楽しかったです。ヴァイオリンがきたら、ヴァイオリンが返して、さらにチェロが下から持ち上げる「こう言ったら、こうきたか！」というようなように楽器で会話をしているかのように感じました。演奏が終わったときは「ブラヴォー」も飛び、皆さんの大満足の気持ちが伝わって来ました。普段札幌のコンサートを聴いていると、ヴァイオリンの音・ヴァイオリンの音・チェロの音とまとまって聞こえてきますが、サロンのミニコンサートは演奏者ひとりひとりの音がよくわかります。札幌はひとつの団体ですが、個性のある演奏者の出す音が集まって出ている音楽なのだと思うと、またオーケストラを聴くときの楽しみも変わります。



交流がすすんだ立食パーティー

第三部の交流パーティーは、「暮らしたアトリエ」の特別ボードブルにスパークリングワインで華やかにスタート。演奏の後の美味しいお料理と楽しい会話で盛り上がりました。長く札幌くらぶの会員をされている方々は本当にクラシック音楽に詳しくて、お話をしていると私はまだ聴いたことのない曲がたくさんあるなと思いました。演奏者の方々とお話が出ると、なんて贅沢な会だろーうと思いました。こんな特別な会の感想文を書かせていただきありがとうございます。ありがとうございました。



イラスト／四宮皓子

会員／四宮わか子

6月・8月 定期演奏会

演奏会を楽しく聴くために

八木 幸三（札幌くらぶ顧問）

第620回定期演奏会

6月21日（金） 19：00
6月22日（土） 14：00
指揮 ユベール・スダーン
ヴァイオリン 竹澤恭子

ユベール・スダーン



竹澤 恭子 ©松永学

■チャイコフスキー

組曲第4番
「モーツァルティアーナ」

この曲は、交響曲第4番と第5番が書かれた10年の間に作

曲されている。この間、チャイコフスキーは、「マゼッパ」などの大規模な4つのオペラや「イタリア奇想曲」、序曲「1812年」など数多くの管弦楽曲を書き、組曲1番から4番までもこの中に含まれる。彼は、幼い頃からモーツァルトの作品に親しんでいた。しかし、貴族的なモーツァルトのイメージは、国民楽派の運動が盛んになり、市民階級のイデオロギーを代表するベートーヴェンやベルリオーズが持てはやされる当時の風潮からは、一般的に乖離されていると言つて良かった。彼はモーツァルトが不当に軽視されることに不満を抱き、この組曲を作曲した。第1楽章

「ジーク」は、「小さなジーク」K574、第2楽章「メヌエツト」は、メヌエツトK355、第3楽章「祈り」は、「アベ・ベルム・コルプス」K618、第4楽章「主題と変奏」は、「グルックの歌劇『メツカの巡礼』の主題による、ピアノのための10の変奏曲」K455をそれぞれ原曲としてしている。

■プロコフィエフ

ヴァイオリン協奏曲第2番

優れたピアニストでもあったプロコフィエフは、1930年代に伴奏者としてフランス人の名ヴァイオリニスト、ロベール・ソエタンと演奏旅行に出かけて

いた。その演奏旅行先で依頼を受けて作曲したのがこの曲。初演のソリストはもちろんロベール・ソエタンが演奏しており、この作品自体もソエタンに献呈されている。

作風は当時のロシアの情勢が影響していると言われ、彼の作品としては、初期の大胆不敵な作品にくらべて伝統寄りになつており、この作曲家特有の乾いたグロテスクな表現は控えられている。第1楽章はパリで、第2楽章はロシアの滞在先で着想された。マドリードで初演されている。

■サン＝サーンス

交響曲第3番「オルガン付き」

この作品についてサン＝サーンスは「この曲には私が注ぎ込める全てを注ぎ込んだ」と述べ、彼自身の名人芸的なピアノのフレーズや、華麗な管弦楽書法、

教会のパイプオルガンの響きが盛り込まれている。初演は大成功を収め、彼は「フランスのベートーヴェン」と称えられた。この交響曲の独創的な特徴は、各所に織り込まれたピアノ

マティアス・バーメルト ©青柳聡



この交響曲には適用されている。

第621回定期演奏会

8月23日（金） 19：00
8月24日（土） 14：00
指揮 マティアス・バーメルト
ヴァイオリン 郷古 廉
チェロ 横坂 源

■武満 徹

「死と再生」
「黒い雨」より

キャンディーズのメンバーだった田中好子が迫真の演技で、高い評価を受けた映画「黒い雨」（監督…今村昌平）は、原爆の恐怖と悲劇を描いた井伏鱒二の小説を映画化したもの。武満徹は、悲痛な哀歌を表すために「弦楽のためのレクイエム」と同じく、弦楽オーケストラによってこの映画に音楽を付けた。「黒い雨」は全曲を通し、静謐でほの暗い弦楽合奏の響きが、原爆投下後に船の上で黒い雨を浴びる主人公の悲惨な運命を暗示しているかのようだ。その中から「死と再生」が演奏される。

以前から仲違いをしていた親友と、一つの曲を通して仲直りしたという逸話があるのがこの二重協奏曲。元来、ブラームスは交響曲第5番を構想していたが、些細なことで不和になっていたヨアヒムにヴァイオリンを協奏曲風に取り扱おうと意見を求め、不和を解消しようとした。ブラームスは少し前にヴァイオリン協奏曲を完成させていたため、17、18世紀の合奏協奏曲の形を近代的な精神で復活させようと、チェロも独奏楽器に加え、管弦楽の総奏部が独奏楽器群と対峙させる協奏曲に仕立てた。ヨアヒムはこの作品を好意的に受け入れた。ブラームスはチェリストのローベルト・ハウ



郷古 廉 ©Hisao Suzuki

■ブラームス ヴァイオリンとチェロの ための二重協奏曲

リンに郷古廉、チェロに横坂源という、今最も旬な奏者を迎える最高のアンサンブルを聴かせてくれることだろう。

■ブラームス

ピアノ四重奏曲第1番

(シェーンベルクによる管弦楽版)

ブラームスは、ピアノ四重奏曲を3曲書いているが、いずれ



横坂 源

(写真協力 札幌交響楽団)

スマンの意見も入れながら、それまでの協奏曲とは違った雄大で威厳に満ちた作品を完成させた。この曲は、優れた二人の独奏者が必要だ。今回は、ヴァイオリンに郷古廉、チェロに横坂源という、今最も旬な奏者を迎える最高のアンサンブルを聴かせてくれることだろう。

も1855年頃に着想され、ピアノの扱いも共通したスタイルが見られる。この第1番は作曲者が28歳の時に書かれ、シューマン夫妻に関わるさまざまな思いが込められ、彼の「青春賦」といった趣が強い。

新進演奏家育成プロジェクト オーケストラ・シリーズに出演して

2019年2月10日、私は日本演奏家連盟が行っている「新進演奏家育成プロジェクト」に出演させていただいた。このプロジェクトは、札幌から福岡まで様々なプロオーケストラをバックに、その地にゆかりのある30歳以下(声楽は35歳以下)の若手を対象に行われている。



ウォルトン/ヴィオラ協奏曲

はソロを弾く機会が少ない。オーケストラのソリストが来てコンチエルトを弾くことも、日本では残念ながら稀である。そんな中でヴィオラの有名なコンチエルトは3曲である。バ

の違いは1対1ではなく1対70であるということだ。そのためソリストが伴奏系で、オーケストラがメロディの個所であっても、ある程度の音量で弾かないと聴こえなくなってしまう。これがピアノ伴奏とオーケストラとの一番の相違と難しさなのを経て学ぶ事は多い。

しかしながら、現在こういった機会が若手に与えられることは少ないので、とてもありがたいプロジェクトである。

今、北海道から続々と若くて素晴らしい演奏家が出ています。そんな彼らがギターでプロオーケストラと共演できることは大きな財産になるはずだ。そして、願わくは

ルトーク、ウォルトン、ヒンデミットのコンチエルトだ。私はその中からウォルトンのコンチエルトにした。リハーサル初日、この曲はオーケストラから始まるのだが、やはりピアノ伴奏とは異なり、オケの立体感や音の厚みを感じた。そして、何より

多くのお客様に聴いていただき、応援していただければ、ますます北海道から素晴らしい音楽家が誕生していくはずである。

札幌ヴィオラ奏者

鈴木 勇人

札幌からも今までに何人も出演しているが、プロオケをバックに弾くことは珍しいので、オケに所属している者にとっても貴重な経験ができる。私自身もオーケストラをバックに弾くのは初めてだった。特にヴィオラという楽器

楽員さんに興味津津

①

オーボエ首席奏者

関美矢子さんに聞く

♪ オーボエとの出会い

生まれも育ちも茨城県の那珂(なか)市です。実家は今も水戸と郡山を結ぶJR水郡線の額田(ぬかだ)駅のそばにあります。小学校は全校生徒が220人くらい、中学校も学年3〜4クラスという小さな学校でした。

父は長い間弓道をやっていた。音楽には興味がなかったのですが、母は音楽が大好きだったようで、二人の兄と姉は小さい頃からピアノを習っていました。私も

も5歳の時から中学3年生まで同じ先生にピアノを習い、高校受験の副科ピアノの対策もお世話になりました。その先生とは、今でも家族ぐるみのお付き合いをさせていただいています。

中学校に入学した時は吹奏楽部に入ろうか、剣道部か、テニス部かと迷っていました。そんな時2歳上の姉に、「とても仲のいい友達が吹奏楽部でオーボエをやっているよ。一緒にやったら?」と勧められ、入部しました。不思議なものでクラリネットは音が出なかったのに、オー

ボエやファゴットはすぐに音が出たんです。ダブルリードが向いていたのかもしれない。

吹奏楽がとても盛んな学校でした。顧問の先生が熱心で、ありがたいことにその先生の友人の方が毎月オーボエを教えに来てくれていました。入部して1か月ぐらいいはみっちり基礎練習をやって、そのあと合奏に参加して3か月後にはコンクールに出られるようになりました。冬に行なわれる吹連のアンサンブルコンクールやソロコンテストには、木管五重奏やソロで出たり、中学最後のコンクールの時はオーボエが活躍する曲を先



小さい時からピアノや歌が好き



オケアカでベルリン・フィル首席フルート・ブラウさんと

♪ 芸高での目新しい日々

生が選んでくれました。高校進学の相談時に顧問の先生から「東京に芸大の附属高校というのがあるから受けてみないか」と言われ、その時はオーボエがどうこうというよりも東

芸高の入試は、まず楽器の実技審査が一次、二次とあって、それに合格すると楽典、聴音、国語、数学、英語などの試験があり、最後は面接でした。入試の課題曲はプロッドというエチュードで、自由曲はテレマンのイ短調のソナタにしました。全国から集まる受験生との出会いが楽しかったです。

高校へは1年間は朝5時台の電車に乗って、なんとか家から通いました。私はオーケストラが身近ではなかったのですが、同級生に弦楽器を弾く人がいる!とびっくりしました。こんなにう

まい人がいる、いろんな曲について詳しい人、外国に何度も行っている人、練習熱心な人、色んな人がクラスメイトにいたの

芸大卒業後、半年間ローマのフランチェスコ先生のところへ留学しました。先生はローマ・サンタ・チェチーリア国立オーケストラの首席オーボエの方

見つけようと、富山市呉羽町にある桐朋オーケストラ・アカデミーに所属しました。これがとても良かったんです。東京の喧騒とか刺激の多いところは、ゆつたりとしていて、ある意味外国で勉強しているかのような雰囲気でした。レッスンスターの居心地がよく、窓からの眺めもお気に入りでした。グラ

で、実現しませんでした。ひとまず日本での足掛かりを

北海道に根づく音楽家に



プロフィール

東京芸術大学附属音楽高校を経て、同大学を卒業。ローマ・サンタ・チェチーリア国立オーケストラ管楽器コースにて研鑽を積む。桐朋オーケストラ・アカデミー研修課程修了。2016年4月より札幌交響楽団首席オーボエ奏者。北海道教育大学岩見沢校、札幌大谷大学にて非常勤講師を務める。

で、実現しませんでした。ひとまず日本での足掛かりを

で、実現しませんでした。ひとまず日本での足掛かりを

で、実現しませんでした。ひとまず日本での足掛かりを

♪ オーボエと向き合って



高校大学同期との室内楽演奏会

チューニングの仕方、楽器では、管楽器のチューニングが終わってから改めて弦楽器がチューニングをして、最後に全員が少し音だしをして終わりという形です。オーボエはリード

あり、オケアカの定期演奏会は富山駅にあるオーバードホールで行われました。そのオケアカにはベルリン・フィル、バイエルン放送響、ベルリン・ドイツ・オペラのメンバーの方や、日本のN響、読響、都響、新日本フィルなど、いろんなオケの先生が来て共演してくれるんです。そこで充実した日々を過ごし、自分でも上達しているなあと実感でき、オケの雰囲気にも慣れていくなかで、本当にオーボエと向き合えた感じがしました。

富山での3年間が終わって間もなく、神奈川フィルの契約団

員のお話を頂きました。契約団員となり1年が過ぎた頃、札幌の首席奏者のオーディションのお話がありました。受ける前に札幌の文化庁公演にエキストラで呼んでいただき、札幌の人たちの雰囲気ですごくいいなあ、

♪ リード作りは音作り

コンサートの始まりのチューニングは、オーボエの音からフワッと広がり、「ああ、始まる」って感じがします。最近慣れましたが、1年間ぐらいいは身構えていました。ステージで初めて出す音ですから、客席がざわざわしているときは気楽に出せるんですけど、シーンとしていると……



た、より良い演奏をつくりたいと思います。

の調整が大変です。リードで音が

がすごく変わるんです。この間、リードの作り方をN響の池田昭子さんが「ちらちらクラシック」で説明していましたが、私もその機械を2、3台持っています。材料の輩は専門店からフランス、イタリア、トルコ産のものを取り寄せ、1、10年寝かせます。それを機械でカンナがけをして、次の機械でシェーピン

♪ いずれはリサイタルを

今年の2月に結婚しました。彼はサラリーマンで、ギターには付き合ってから初めて来たそうで、ホールの優美さにとても感動していました。彼とは私の高校時代の友人を通じて知り合いました。クラシックにはあま

グ、真鍮のチューブに挟み込み、糸でしつけ、針金で仮止めして乾かします。絹糸で巻くと、やつとリードらしい形になり、削っていきます。ちよつとの差で音がすごく変わってしまうので、10本のうち本番で使えるのが1、2本、リハーサルで使えるレベルはプラス1、2本。そのくらいが私のリードケースにストックされ、あとは使えません。定期はリハで2、3本使い、一番調子の良い1本を本番で使います。曲によって変えることもあります。

ですし、公園に行ったり、湖に行ったり、温泉に行ったりするのも好きです。私は演奏にやりがいを感じているので、仕事をしなくなったら逆にストレスが溜まってしまいかもしれません。仕事を通じて様々な出会いから学ぶことも多く、演奏に集中して向き合える、幸せな仕事だと感じています。

好きな曲はいくつかあります。サン・サンスの「ソナタ」、シューマンの「3つのロマンス」、あまり知られていないけれど、カール・フィリップ・エマニエル・バッハの「オーボエ・ソナタ」もとてもきれいです。テレマンの「12のファンタジー」「ターフェルムジーク」も素敵ですね。

オーボエはバロック時代から活躍していたことも魅力の一つだと思います。バロックだったと透明感があつて、ちよつとしてりして、陰影のある演奏になるし、この前の「春の祭典」やリヒャルト・シュトラウスだと華やかに奇抜なキャラクターが出る。曲によって雰囲気を変えられる楽器ですね。

これからは、来年の秋ぐらいまでに、私自身のきちんとした企画で、オーボエらしいプログラムのリサイタルを計画したい

モーツァルト 協奏交響曲の演奏後



父や母も、年に2、3回は聴きに来てくれます。旅行も兼ねて、「次はどの季節に行こうか」といつも話しています。中学校の顧問の先生が札幌の東京公演に来てくださった時に、「演奏を聴いて、関さんに音楽の道を勧めてよかった」というメッセージをもらいました。本当に嬉しく、ありがたかったです。

担当／中居・村山・塚田・島田

2019年度

「札幌くらぶ」報告総会

SCARTSにて開催

昨年の総会において、「札幌くらぶ」の総会並びに「サロンの会場として「札幌市民交流プラザ」を活用してはどうかとの提案がありました。

それを承けて今年度の総会

は、5月19日(日)「SCARTSモール」にて開催しました。今回は役員改選を伴わない「報告総会」としての開催でしたが、約40名の参加がありました。会場となった「SCARTSモール」は「市民交流プラザ」1Fにある中央広場のオープンスペースで、通りかかる方もたくさんいて、開放感いっぱい場所でした。今回は「札幌くらぶ」も加

盟している「V-net」主催で行われていた「アートボランテニアウィーク@SCARTS」に参加する形で、「市民交流プラザ」を活用するチャンスが到来しました。

総会での報告内容については「総会模様(報告書)」を同封させていただきます。特に「全国のおケファン」の話題でもあります。楽譜支援事業、「フリーストコンサート」に続く中学生招待事業、そして「全国のおケファン」を結集したJOF活動についても、これからも会報等を通じてその活動に注視していただきたいと思っています。



SCARTSモールにて

す。hitaruは自主事業の展開や札幌、札幌のアートイスたちがどのように活用するか楽しみでもあり、課題でもあります。「SCARTSコート」は

遮音性が高く、100名程度のイベントの活用に向いています。情報館は「ワーク」、「ライフ」、「アート」をコンセプトにして、入門書から専門書までの図書約4万冊と600種の雑誌、90種の新聞がそろっています。お持ちの図書カード(貸出券)でミーティングルーム(12名入室可能)やグループ席を予約することができます。図書館の本を持ち込めるカフェもあって、じっくり座っての読書を楽しむことも可能です。

札幌くらぶ副会長

西川吉武

第618回定期演奏会を聴いて

至福のひととき

低く垂れこめた雨雲が瞬時に

も、常に僕は生きていることの喜

この作品における聴きどころ

多くのピアノリストの例に漏れ

視界から消え去り、青一色に輝く蒼空を2羽のひばりがさえずりながら舞い上がるようなたがずまい。第2楽章第4変奏のフルートとファゴットの音符群による繊細な戯れ(124小節から)は、いつものことながら、ピアノ協奏曲におけるモーツアルトの木管楽器の扱いの秀逸さと楽想転換の閃きを再確認させる瞬間となった。

さらに第3楽章218小節からのアンダンテイノ・カンタービレでの、ホルンの和音に支えられた木管楽器による満ち足りた温もり。札幌交響楽団第618回定期演奏会での第22番のピアノ協奏曲(K482)はまぎれもなくモーツアルトの最高傑作に接する、至福のひとときを提供してく

この協奏曲には作曲者自身のカデンツァが残されておらず、また第20番(K466)のようにベートーヴェンを筆頭とする大作曲家が創作するというのもなかった。その様は百花繚乱、多くのピアノリストが個性豊かなカデンツァを提供してきた。それが聴く者の関心を煽るのであるが、当日弾かれたのは

僕大好きな、モーツアルトの最高傑作としての第22番のピアノ協奏曲。しかし、当日のプログラムによると、札幌での演奏は今回を含めてわずか4回にすぎないそうである。作品の価値と人気は決して一致しないのだ。残念なことである。



入会案内ができました

今回、総会と「サロン」の会場となった「札幌市民交流プラザ」は昨年10月に歌劇「アイダ」で幕を開け、全貌を見せました。「札幌文化芸術劇場(hitaru)」、「札幌文化芸術交流センター(SCARTS)」、「札幌市図書・情報館(課題解決型図書館)の3施設からなる複合文化施設です。すでに「市民交流プラザ」を訪問された方も多く思いいます。創成川通りまでの巨大な建物は眼を見張るばかりで

このフレーズを聴くだけで

それが聴く者の関心を煽る

会員/村岡範男

会員/村岡範男

JOFFC交流会に参加して

3月17日(日)、「日本ブロー
ンケストラファンクラブ協議会
(JOFFC)」の幹事会と交流会
が都響倶楽部の主催で、開催され
ました。

「札幌くらぶ」からは上田会長
ほか6名が参加し、九響倶楽部を
除く加盟9団体から35名が参加
しました。

幹事会が行なわれた後、交流会
に先立って、都響スペシヤル「エ
リアフ・インバル指揮、ブルック
ナー：交響曲第8番(ノヴァーク
第2稿1890年版)」をサント
リーホールで鑑賞しました。

今後の活動について 意見交換

幹事会では9団体の代表・幹
事が集まり、総会開催の意義や
今後の運営体制等について意見
交換を行いました。2006年
の設立総会以来13年が経過し
ました。その間地方オーケスト
ラを取り巻く状況は少しずつ変
化しており、それに伴ってJOF
FCの活動も一度見直すべきで
はないかとの声は以前からあり
ました。



毎年各地で開催されている総
会には、その地域の新聞社、行
政のトップなどが参加すること
もあり、我々の活動は注目され
ていると思われます。地方オー
ケストラを応援し、支えること
に加えて、その時々音楽創造
に関する課題について発信する
という意味でもJOFFCの活動
は意義があることと思います。

この13年間、各ファンクラブ
の仲間たちが一堂に会して日頃
の活動の課題や悩みを共有し、
「ブル8は記憶に残る名演奏」
ご存知の通り、「ブル8」は大
編成で演奏されます。当日も16
型の弦楽5部に管打楽器、さら
にハーブが加わって、10
0名になるうとする奏者で
サントリーホールの舞台は
あふれるほどでした。演奏
時間も70分を超え、インバ
ルの指揮は強弱が明快で特
に金管楽器と弦の美しさが
際立つ演奏だったように感
じました。なんと演奏終了
後、楽員さんが解散しても
インバルへの拍手が鳴りや
まず、スタンディングオー
ベーションは続きました。
インバル指揮の、この日の
「ブル8」は、これからも名
演奏として語り継がれるに
違いありません。

さらには各地のオーケストラの
演奏を聴く楽しみは格別のもの
がありました。今後もこれまで
通り活動を継続していくことを
全員一致で確認して幹事会は終
わりました。

また、懸案であった役員改選
についても上田文雄会長を「終
身JOFFC会長」にとの声が高
く、本年11月23日(土)の仙
台総会において提案される予定
となっております。

ブル8は記憶に残る名演奏

交流会では全国から集まった
メンバーの乾杯の声が高らかに
広がりました。昨年9月に開催
した札幌総会以来の再会に嬉し
さがいっぱいの様相でした。

交流会は中華で乾杯!

「インバル爺さんはなぜあんなに元気なのか」、「この演奏によつてブル8の素晴らしさを再認識した」、「JOFFC札幌総会は見事な運営でした」、「札幌総会では9・6地震でhitaruが見学できず残念だった」、こんな声飛び交う交流会でした。

参加者が仙台での再会を約束した夜となりました。



ロビコンで聴いた、見た 「ダルムシュタットの幼稚園」って何?

4月の定期演奏会のロビーコンサートでは風変わりな
曲が演奏されていました。演奏者の飯村真理さんに、曲目
について説明を加えていただきました。

この曲はクロノス弦楽四重
奏団の委嘱により2015年
に作曲されました。作曲家マー
ク・アツプルバウムは作曲・音
楽理論の教授職の傍らジャズ
ピアノリストとしても活躍して
おり、視覚や演劇的要素を取り
込んだ実験的な音楽作品を多
く作っています。

楽譜にはごく普通に17小節
分の音符が書いてありますが、
その真上に別バージョンとし
て、ジェスチャーの種類とタイ
ミングが文字と記号
で書き込まれています。まず全
くBatter Up & Check
Matchなど。まずは全
員で音符だけのバー
ションを演奏し、最後
まで来たら一人が楽
器を置いて立ちあが
ります。立っている人
は譜面に記載された
タイピングでジェス
チャーを演じ、残りの
奏者は先程と全く同
じ17小節を楽器で演
奏します。これを計4回繰り返
し、最後に全員で無音の17小節
を「演奏」したら終わりです。
ダルムシュタットは権威ある
老舗現代音楽祭が行われている
街の名前、「幼稚園」は現代音楽
が持ち得る子供っぽい悪戯心を
表したものだと思われれます。

札幌ワイオリン
副首席奏者
飯村真理

札幌くらぶ副会長
JOFFC幹事長 西川吉武



入川奨さん キタラのバースデイに出演

札幌ティンパニー・打楽器首席奏者入川奨さんが「キタラのバースデイ」に出演する。オルガン奏者ティエリー・エスケシュのリサイタルの中でオルガンと打楽器とのコラボで演奏する。

オケを離れた演奏に注目！

7月6日(土) 15:00
全席指定2000円
キタラ 大ホール

札幌コンサートマスター大平まゆみさんのミニコンサート

札幌コンサートマスター大平まゆみさんのミニコンサートが5月9日(木)、白石区総合庁舎の「まちづくりイベント広場」であった。裁判員裁判制度の広報活動の一環として開催された。大平まゆみさんのホームページにも告知されていた。ファンも含め約90名が集った。「愛の挨拶」を奏でながら登場し、曲の解



随想 本棚の隅から 23

本棚には、まだ79年の「ポリシヨイ劇場管弦楽団」と84年の「ベルリン国立歌劇場管弦楽団」の大きなプログラムが残っているけれど私の記憶には何も残っていない。ベルリン・シユターツ・カペレは、オトマール・スウイトナーを見に行った、それだけらしい。

私には、まだ79年の「ポリシヨイ劇場管弦楽団」と84年の「ベルリン国立歌劇場管弦楽団」の大きなプログラムが残っているけれど私の記憶には何も残っていない。ベルリン・シユターツ・カペレは、オトマール・スウイトナーを見に行った、それだけらしい。

私のお気に入りの「ポリシヨイ劇場管弦楽団」と84年の「ベルリン国立歌劇場管弦楽団」の大きなプログラムが残っているけれど私の記憶には何も残っていない。ベルリン・シユターツ・カペレは、オトマール・スウイトナーを見に行った、それだけらしい。

私のお気に入りの「ポリシヨイ劇場管弦楽団」と84年の「ベルリン国立歌劇場管弦楽団」の大きなプログラムが残っているけれど私の記憶には何も残っていない。ベルリン・シユターツ・カペレは、オトマール・スウイトナーを見に行った、それだけらしい。

スタッフの声

▼今年はお花見が何度もできた。麗らかな四月初めは横浜で。ホテルから見下ろす「みなとみらい地区」の桜は満開、人も満開。我が家の山桜は「平成」最後の日に見事に散っていった。「令和」最初のお花見は北大構内の八重桜と見事な枝垂れ桜を愛でた。(井上)

▼今年もPMFの季節がやって来る。7月から約1か月、世界中の若人が音楽の素晴らしさを学びに札幌の地に集結する。かたやPMF芸術監督は日程モロ被りのバイロイト音楽祭で1か月以上指揮棒を振り、途中で、PMF札幌最終日に1日だけ指揮をする。真剣な若手奏者を見る度に芸術監督の交代を切望する限りである。(吉川)

▼15年前から運営スタッフとして活動を始めましたが、2010年1月に転勤になり、仙台に3年、神戸に6年、今年ようやく戻って来ました。9年間は札幌定期演奏会を聴くために毎月帰省し、癒され、心の支え・楽しみでもありました。札幌の益々の発展と活躍のお役に立てるよう微力ながら応援する所存です。(深井)

スタッフの活動報告

- 3月16日(土)
札幌市内中学校吹奏楽部招待事業
厚別南中33名
伏見中35名
中央中18名
- 3月17日(日)
JOF C東京交流会
「札幌くらぶ」より7名参加
- 3月25日(月)
第11回運営会議
- 4月22日(月)
4月期運営会議
- 5月18日(土)
札幌市内中学校吹奏楽部招待事業
手稲西中16名
藤野中23名
- 5月19日(日)
第25回「札幌くらぶ」サロン
2019年度「札幌くらぶ」総会

札幌くらぶ 検索で

HPではコンサート情報も発信しています。

私のお気に入りの「ポリシヨイ劇場管弦楽団」と84年の「ベルリン国立歌劇場管弦楽団」の大きなプログラムが残っているけれど私の記憶には何も残っていない。ベルリン・シユターツ・カペレは、オトマール・スウイトナーを見に行った、それだけらしい。

ラフマニノフ
パガニーニの主題による
狂詩曲 作品43
チャイコフスキー
交響曲第6番ロ短調
作品74「悲愴」

私のお気に入りの「ポリシヨイ劇場管弦楽団」と84年の「ベルリン国立歌劇場管弦楽団」の大きなプログラムが残っているけれど私の記憶には何も残っていない。ベルリン・シユターツ・カペレは、オトマール・スウイトナーを見に行った、それだけらしい。

尾高マエストロは指揮台の上で踊るように指揮をしていた。バガニーニの狂詩曲はCDからFMでしか聴いたことが無かったのに目の前でオーケストラが演奏している。天井から音が降りそそいでくる。美しい音が全身を包む。至福とはこういう時のことか！そして、チャイコフスキーの「悲愴」ときては油頭(すわとう)刺繍のハンカチがびしょ濡れになった。

私のお気に入りの「ポリシヨイ劇場管弦楽団」と84年の「ベルリン国立歌劇場管弦楽団」の大きなプログラムが残っているけれど私の記憶には何も残っていない。ベルリン・シユターツ・カペレは、オトマール・スウイトナーを見に行った、それだけらしい。

心につぶらぬ栄養が補給されて、私の人生は再起動した。

会員/井上明子

会員/塚田総